

日本の漢詩—COE特別講座「江戸の漢詩」を担当して—

石川 忠久

そもそも漢詩は、中国文学の華、と称される如く、世界文学の中でも最も成熟度の高い「言語芸術」と呼んで差し支えなからう。『詩経』がすでに紀元前十二世紀の詩を収め、それより二千年、川の流れに譬えれば、上流から休むことなく流れ、途中より幾多の支流を併せ、さまざまな養分を溶かしこんで唐初に至って完成の域に達したのである。

『詩経』の四言、『楚辞』の「兮」字を挟む三言プラス二言、漢代よりの五言、六朝末の七言と、形式も豊かに整えられ、題材も広がり、修辞も練られて、西暦七〇〇年ごろには、五・七言の絶句（四句の形式）、律詩（八句）、古詩（句の字数も、句数も自由）が定まった。

折しも、日本では、中国より漢字を学び、それによって仮名を作り、表記の方法を工夫する「文明の夜明け」の時代に突入、遣隋船、遣唐船の往来によって直接学習に励む動きが始まった。七五一年には、早くも日本最初の漢詩集『懷風藻』が編纂されたが、ちょうどこの時期は、唐土では李白・杜甫の二大詩人の活躍の最中であつた。二大詩人の作品と『懷風藻』の作品とは較べるまでもない。同じ時代に作られながらも両者の懸隔は天地の差がある。文明場裏に駆け出しの異国人には、世界最高の言語芸術の習得は容易なことではなかつたのである。

それでも、平安から鎌倉・室町へ、王朝貴族から五山の僧侶へと詩の大河の流れに棹さし、撓まず努力を重ねて行くうち、江戸へ入ると状況は急速に展開する。

一六〇三年（慶長八年）、徳川家康によって幕府が開かれるや、その「偃武」（武を偃め、文を興す）の大号令の下、戦国の乱世はたちまち泰平文治の世となった。

漢詩にあつては、藤原惺窩より、松永尺五、林羅山、石川丈山、木下順庵の草創期を経て、寛文・延宝期には早くも新井白石が擡頭し、天和・貞享から元禄への十八世紀に入るころには、室鳩巢、雨森芳洲、荻生徂徠、服部南郭、祇園南海等々嚮を並べて、漢詩の海へと乗り出した。

学習が進んでくると、漢詩の魅力は汲めども尽きない。唐風を満喫して飽きれば宋風を追い、やがて自然に和風が醸し出される。十八世紀後半、安永・天明から、寛政・享和と進んで、十九世紀に入り、文化・文政・天保までの七十年間ほどは、日本漢詩の最高潮の時代と言えよう。東に西に、都会に地方に、詩人は雲の如く輩出し、数え立てるに暇もない。頂点の詩人たちの力量は本場の唐・宋に引けを取らぬまでに至る。幕末から明治へかけても、その勢はなお保ち続けるのであった。

このような現象は、世界文学の中でも稀有のことと思われる。外国の、しかも高級な詩歌を我が物として自由に作り、高い水準に達するうち、自然に独自の味わいまで出すに至る、というようなことは他の国では考えにくい。仮りに、英語の詩、フランス語の詩に置き換えてみれば、それは容易に了解されるであろう。

漢詩の受容と盛行は、当然ながら他の日本の文学に深く影響を及ぼしている。古くは『源氏物語』に於ける白楽天、近くは芭蕉の『奥の細道』に於ける李白、杜甫を思い起こせばよい。ことに近世に於いては川柳や狂詩（唐詩などのもじり）の興隆に、明の李攀龍編『唐詩選』の普及は見逃せない。明治以後の漱石や鷗外の小説などにも漢詩文の根底が深くうかがわれ、島崎藤村や佐藤春夫の現代詩にも漢詩の影は濃い。言うなれば漢詩は日本文学のみならず日本文化のすべてに亘って、その理解には漢詩の学習が必須なのである。

「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」として、21世紀COEプログラムの「革新的な学術分野」に応募したのは、近年

とみに漢文教育、漢文研究への関心が薄れてきた我が国の風潮が、単に我が国のみならず、国際的にも日本文化理解の根底を危うくしているという認識から、いまの時点で漢文教育、漢文研究の吟味、強化をはかることこそ革新性を有すると判断したことで、我が二松學舎が、漢詩漢文の教育研究に長い伝統をもち、今なおこの方面に最も特色を発揮していると自負するからである。

二松學舎は、もと明治十年（一八七七）、漢学塾として開かれた。塾祖三島中洲（一八三〇—一九一九）は岡山県倉敷の人。備中高梁（岡山県）の儒者山田方谷（一八〇五—一八七七）に漢学を学び、生涯二千七百余首の作品を遺した漢詩人であった。大正天皇（一八七九—一九二六）の皇太子時代より漢詩文の指導に当たったことはよく知られる。二松學舎からは、方谷の後を継ぎ、後に二松學舎専門学校長を務めた山田濟斎（方谷の義孫）、宮中顧問官国分三亥等の漢詩人が出、また漢詩人として鳴る濱青洲、金子清超等が長く教鞭を執って伝統を継承した。

昭和五十二年（一九七七）、二松學舎は創立百周年を迎えるに当り、これを記念して漢詩の伝統を宣揚すべく「二松詩文会」を組織した。全国の同好の士を糾合し、機関雑誌『二松詩文』を刊行した。これは年四回発行し、通巻百二十六号に至っている。同人は十一人、会員は約三百名、会員は一回につき二首の添削を受けることができるようにしている。

なお、この二松詩文会を中核として、平成十五年、全日本漢詩連盟が発足し、機関誌『扶桑風韻』を発行、会員は千七百余名を数える。また、県単位の組織を促して、平成二十年までに一都十五県（東京、千葉、茨城、栃木、神奈川、群馬、埼玉、岡山、福井、愛媛、香川、徳島、高知、鳥取、島根、福岡）の連盟が誕生した。各連盟はそれぞれ研究会や吟行を催し、漢詩の裾野を広げるべく活動している。

また、二松學舎では、すでに活発に行われている『俳句甲子園』にヒントを得、『漢詩甲子園』を企画し、平成十八年度より、全国の高校に呼びかけて漢詩及び漢詩の鑑賞文のコンクールを催した。漢詩の公募は大学生にも広げた。その応募の状況は、十八年度は（A）高校生87（B）鑑賞文46）、（C）大学生30、十九年度は（A）348、（B）163、（C）58、二十年

度は (A) 194、(B) 158、(C) 118 と増加の傾向を示している。質の点ではまだまだだが、着実に向上することが期待される。根気の要することであるが、展望は明るい。

今回、21世紀COEプログラムのもとに、日本漢詩の最盛期である「江戸の漢詩」を取り上げて特別講座を設けたのも、如上の伝統とそれに基づく諸活動を踏まえてのことである。

特別講座は、日本の、ことに江戸の漢詩の意味と価値を広く世に知らしめるべく企画し、平成十七年度より開講した（午後六時より開始）。テキストとして『二松漢文 日本漢詩』を編纂し、上代の文武天皇「詠月（月を詠ず）」（『懷風藻』所収）より、現代の阿藤大簡「訪寂光院（寂光院を訪ぬ）」まで六十首を取り上げた。うち過半数の三十四首は江戸の詩が占めている。講義にはプリントや前記テキストを用い、一首ずつ作品を鑑賞するようにした。受講者数は55―56―66―75名と尻上がりに増え、盛況であるのはまことに喜ばしい。受講者の年齢は、十代から八十代に及び、主力は七十・六十代の71―セント、さらに五十・四十代17パーセント、三十代以下10パーセントという割合である。男女比はほぼ半々（男性52パーセント）、職業は無職の高年齢が多いが、現役の大学教授や高校教諭、若い方では院生、学生も数名いる。本講座は、21世紀COEプログラムが終了した後も継続して開講する予定であるが、今後は若い層をもう少し引きつけるように、時間帯や講義内容などをさらに工夫したいと考えている。